廃助傍義

ノート

山上正尊案
名古屋別院

2020.05.13

本山提要
【題意】
【出拠】
【釈名】
【義相】一、源空聖人の廃助傍義
『大経』「三輩章」を読む　7
①『選択集』「三輩章」の義　9
②『漢語灯録』「大経釈」の義　24
③廃立の論拠　26
二、浄土異流の義
①鎮西義　28
②西山義　29
三、宗祖の義
①善導・源空義の相承　31
②廃助傍の所拠　35
③「行信」の廃立　36
四、要真二門と権仮方便
①方便行信の設意　40
②信前信後の助傍　42
【参考　平成十九年　「正助二業」　本山判決】

佛告阿難・十方世界・諸天人民・其有至心・願生彼國・凡有三輩・其上輩者・捨家棄欲・而作沙門・發菩提心・一向專念・無量壽佛・修諸功德・願生彼國・此等衆生・臨壽終時・無量壽佛・與諸大衆・現其人前・卽隨彼佛・往生其國・便於七寶華中・自然化生・住不退轉・智慧勇猛・神通自在・是故阿難・其有衆生・欲於今世・見無量壽佛・應發無上菩提之心・修行功德・願生彼國

佛語阿難・其中輩者・十方世界・諸天人民・其有至心・願生彼國・雖不能行作沙門大修功德・當發無上菩提之心・一向專念無量壽佛・多少修善・奉持齋戒・起立塔像・飯食沙門・懸繒然燈・散華燒香・以此廻向・願生彼國・其人臨終・無量壽佛・化現其身・光明相好・具如眞佛・與諸大衆・現其人前・卽隨化佛・往生其國・住不退轉・功德智慧・次如上輩者也・

佛告阿難・其下輩者・十方世界・諸天人民・其有至心・欲生彼國・假使不能・作諸功德・當發無上菩提之心・一向專意・乃至十念・念無量壽佛・願生其國・若聞深法・歡喜信樂・不生疑惑・乃至一念・念於彼佛・以至誠心・願生其國・此人臨終・夢見彼佛・亦得往生・功德智慧・次如中輩者也

20220729更新　廃助傍義

本山提要

【題意】

『無量寿経』三輩段には、念仏の他に諸行が往生の行として説かれている。これについて源空（法然）聖人が、『選択集』「三輩章」で廃・助・傍の三義をもって廃立に帰するとされた義を窺い、宗祖における相承とその正意を明らかにする。

【出拠】

『無量寿経』三輩段

『選択集』「三輩章」（文は省略する）

【釈名】

「廃」「助」「傍」

【義相】

一、源空聖人の廃助傍義

①『選択集』「三輩章」の義

②『漢語灯録』「大経釈」の義

③廃立の論拠

二、浄土異流の義

①鎮西義

②西山義

三、宗祖の義

①善導・源空義の相承

②廃助傍の所拠

③「行信」の廃立

四、要真二門と権仮方便

①方便行信の設意

②信前信後の助傍

【題意】

『大経』三輩段には諸行と念仏によって往生が説かれている。何のために諸行が説かれたのか、その仏意を『選択集』三輩章を通して明らかにする。

【出拠】

『選択集』「三輩章」（『註釈版』七祖篇1214頁～）

三輩念仏往生の文

（『註釈版』七祖篇1216頁）

問ひていはく、この釈いまだ前の難を遮せず。なんぞ余行を棄ててただ念仏といふや。

答へていはく、これに三の意あり。

一には諸行を廃して念仏に帰せしめんがためにしかも諸行を説く。

二には念仏を助成せんがためにしかも諸行を説く。
三には念仏・諸行の二門に約して、おのおの三品を立てんがためにしかも諸行を説く。
（中略）（『註釈版』七祖篇1220頁）
おほよそかくのごときの三義不同ありといへども、ともにこれ一向念仏のための所以なり。初めの義はすなはちこれ廃立のために説く。いはく諸行は廃せんがために説く、念仏は立せんがために説く。次の義はすなはちこれ助正のために説く。いはく念仏の正業を助けんがために諸行の助業を説く。後の義はすなはちこれ傍正のために説く。いはく念仏・諸行の二門を説くといへども、念仏をもつて正となし、諸行をもつて傍となす。ゆゑに三輩通じてみな念仏といふ。ただしこれらの三義は殿最知りがたし。請ふ、もろもろの学者、取捨心にあり。いまもし善導によらば、初め(廃立)をもつて正となすのみ。

【釈名】

廃

諸橋『大漢和辞典』には
①いへがかたむく。かたむく②ふす。ふせる。③おちる。④すたれる。⑤足のないうつわ⑥すてる。⑦おく。とめておく。⑧たくはへる。⑨かはる⑩大きい⑪ならふ。⑫やむ⑬うごく⑭はねる
という意味が挙げられている。
Q　いずれを取るか。
A　「⑥すてる」を取る。「すてる」には
廃棄・廃捨すてる、廃止やめる、廃去さる、廃除のぞく、廃退しりぞける・用いない
という意味がある。

●立

廃と対義語となる立とは
①たてる樹立　組織・きまり、仕事の基礎などをしっかりきめる。（自立。立国。立法度。）
②たつ。たてる。位に即く。取り上げて位に即かせる。跡継ぎに決める。
廃立ハイリツ　今の君主をやめさせて別の人を君主とすること（史記、後漢書など）。廃は辞めさせる。立は即位させる。
今は　諸行を廃棄して　念仏を樹立する　ことをいう。
『大経』三輩段では
廃棄　諸行（出家　発菩提心　持戒　起立塔像など）
樹立　念仏
という内容になるが、義相に譲る。

助

諸橋『大漢和辞典』には
①左佐乍たすける。手だすけする。力を貸す。②たすけ③益ます。利益する。④成なすなどが挙げられている。
Q　いずれを取るか。

A　①④。手助けし、力を添えて事を成しとげる。扶助・助成の意
今は諸行や助業が能助。念仏が所助。

「散善義」の正助
　正　　正定業の略称
　（正決定）正当なる決定往生の行業。
　（正選定）五正行中第四の称名は、第十八願所誓の行なるが故に正定業という
　助　　助業の略称
　（扶助）　正定業たる称名を扶助する行業
　（助伴）　正定業に随伴する行業

正助の物体
　正定業　称名
　助業　①（「散善義」）読誦、観察、礼拝　と　讃嘆供養。
　　（『礼讃』）身業礼拝門、口業讃嘆門、意業憶念観察門、作願門、回向門
　　②（『大経』）出家　発菩提心　持戒　起立塔像など
　　（『往生要集』）大菩提心、護三業、深信、至誠、常　と　随願

正の釈名に正当正直を取ると、正助は厳密には対目にならない
　正行　正当、正直まっすぐ（傾邪に対す）
　　浄土に正当正対する往生の行業
　　阿弥陀仏の浄土にまっすぐまさしく往生する行業
　雑行　邪曲
　　浄土に不当な行業を邪曲して往生の業とする
　　此土入聖・他方浄土・世俗の道徳の行を曲げて往生行に転じた行業
　雑多　「雑行無量なり。具に述ぶるに遑あらず」（二行章）
　間雑　「人天菩薩等の解行、雑せるがゆえに雑といへり」（観経隠顕197）
　雑通　「純（モハラ）極楽之行に非ず。人天及び三乗に通ず。亦十方浄土に通ず。故に雑と云う也。」（二行章1263）

この正行の中で正定業と助業を対目にした場合、助は扶助、助成の字義なので、正定業をたすける行業である。
能助と所助の関係すなわち正定業と助業の関係は君主と下臣、監督と助監督のような関係にあるから、正の字義
　正＝　君・主・長　　をさ、かしら
にあたり、助はこれに附随・随伴してその仕事を輔佐するものであるから「助伴」の義がある。
扶助はもともとの意味。助伴は義から立てた意味。

●《参考》諸師の「正助二業」の名義

（円月師）（『真宗叢書』2、245）
　正「从一・一以止」（一にしたがう、一をもってとまる）一を守って動かない。

ただしい・自ら専の義に合す。『疏』に「専依往生経行行者是名正行」の意。
まっすぐ・正真也、「方直不曲謂之正」と、邪に対す。正定業の正の意。
かしら（おさ）正　君也主也長也
助　佐の義　直接手を下してたすける。手だすけする。心でたすける。
はげましてなしとげさせる。
扶の義　往因を扶助するの義に約する時（要門）
修相を扶助する時　（弘願）

（石泉師）
正　長の義　君の義
助　佐の義　輔の義　扶助・佐助・輔助の義。
前三後一の助業が正業の弘通を扶助する。

（善譲師）
『選択集指津録』
正　主の義
助　佐の義
『論要』
正　長の義　君の義
助　佐の義　輔の義　　君正臣佐の意

（月珠師）『対問記』『水月記』
正定業　正決定業（称名は衆生往生を正しく決定するの業因なるが故に）
助　扶佐の義　称名に随伴して如実の行相を助成する因を助成する意でない
称名すでに正決定の業因といい、往因円満して欠くることなし。若し助をかって往因を成ずるとなれば、正定業と名ずくることを得ず
業　業因　正定業につく　因体
業作　助業につく　修相につく
据正定業＝助業は正定業の順彼仏願の行なるに対し、非本願の行要門定散行（因体）
据助業　＝正定業は念仏の修相を扶助して如実の行を成ずる、即ち称名を主として前三後一をその助佐とし正助ともに弘願行者の報恩の修相

傍

諸橋『大漢和辞典』には
一　①かたはら。てぢか。そば
二　左右に付き従ふ。侍る。
三　ちかづく。よる。
四　やむを得ないさま

Q　いずれを取るか。
A　一、二　そばに付き従ふ。

正は主の義　　直系

傍は従の義　傍系（直系から分岐した支系）
傍出（横から出る。わきから出る）

二門章　1255

正明往生浄土教　三経一論
正　往生浄土を主たる本来の目的として説かれた経
傍明往生浄土教　『華厳経』『法華経』などでは
正　成仏を主たる本来の目的、しかも此土入聖が本来の目的として説かれた経
傍　往生浄土は主たる目的ではなく、副（そえもの）として説かれた経
此土で成仏できなかった者に、修行を続ける場として往生が説かれる。

【義相】一、源空聖人の廃助傍義

『大経』「三輩章」を読む

Q 『選択集』三輩章の標章如何

A 「三輩念仏往生の文」

Q どういう意味か？

A 『大経』三輩段は念仏往生を説いているという意味

Q 『大経』三輩段の往因と往生の様子を示せ

A

	上輩	中輩	下輩
状態	（出家）捨家棄欲 作沙門	（在家）不能行 作沙門大修功徳	（在家無善）仮使不能作諸功徳
諸行 念仏	発菩提心 一向専念無量寿仏	当発無上菩提之心 一向専念無量寿仏	当発無上菩提之心 一向専意乃至十念念無量寿仏
			（欲生）願生其国 （信楽）若聞深法歓喜信楽不生疑惑 （行）乃至一念 （至心）念於彼仏以至誠心願生
諸行	修諸功徳 願生彼国	多少修善　奉持斎戒 起立塔像　飯食沙門 懸繒然灯散華焼香 以此廻向願生彼国	
往生 （臨終見仏）	（真仏来迎） 此等衆生臨寿終時無量寿仏与諸大衆現其人前即随彼仏往生其国便於七宝華中自然化生住不退転智慧勇猛神通自在是故阿難其有衆生欲於今世見無量寿仏応発無上菩提之心修行功徳願生彼国	（化仏来迎） 其人臨終無量寿仏化現其身光明相好具如真仏与諸大衆現其人前即随化仏往生其国住不退転功徳智慧次如上輩者也	（夢中見仏） 此人臨終夢見彼仏亦得往生功徳智慧次如中輩者也

Q 三輩に共通する往因は何か

A 菩提心と念仏（一向専念無量寿仏、一向専意乃至十念念無量寿仏）

Q 往因について上中下の違いは何か

A 上輩　出家して諸功徳を修する

中輩　在家で多少の善を修する

下輩　無善

Q　三輩に共通する得益は何か
A　臨終に見仏すること
Q　見仏について三輩の違いはなにか
A　上輩　真仏が来迎する
　　中輩　化仏が来迎する
　　下輩　夢の中で見仏する
Q　生因三願を読め
A　⑱設我得仏十方衆生至心信楽欲生我国乃至十念若不生者不取正覚唯除五逆誹謗正法
　　⑲設我得仏十方衆生発菩提心修諸功徳至心発願欲生我国臨寿終時仮令不与大衆囲繞現其人前者不取正覚
　　⑳設我得仏十方衆生聞我名号係念我国植諸徳本至心廻向欲生我国不果遂者不取正覚
Q　菩提心・念仏・諸功徳、臨終見仏はどの願に誓われているか。
A　⑱念仏
　　⑲菩提心　諸功徳　臨終見仏
　　⑳念仏

【参考　異訳の三輩段と生因三願】

・『大阿弥陀経』の三輩は生因三願（第五願第六願第七願）の成就文となっている

（『聖典全書』一巻129頁）　（165頁）

第五願　前世作悪　聞名　第三輩
第六願　在家善人　作善（布施　塔をめぐる　焼香　散花など）　第二輩
第七願　出家善人　六波羅蜜　第一輩
　第二輩と第三輩には胎化が説かれる

・『大阿弥陀経』と『平等覚経』には『無量寿経』第十一願第十七願第十八願成就文に相当する文がない。

・『無量寿経』と『如来会』

第十一願第十七願第十八願成就文のあとに三輩往生がある。また胎化段は別に設けてある。

【参考　三カ所の乃至一念】

法然聖人　『選択集』利益章（『聖典全書』一巻1281頁）（『註釈版』七祖篇1223頁）

弥勒付属

いまこの「一念」といふは、これ上の念仏の願成就（第十八願成就文）のなかにいふところの一念と下輩のなかに明かすところの一念とを指す。

（文意）『大経』には「乃至一念」の語が3カ所あるが、称名に利益が説かれるのは弥勒付属において説かれた。

……三カ所とも行の一念と読んでおられる。

宗祖は　（行）弥勒付属　（信）本願成就文　（判釈なし）三輩段

①『選択集』「三輩章」の義

本文	メモ
私に問ひていはく、上輩の文のなかに、念仏のほかにまた捨家棄欲等の余行あり。中輩の文のなかに、また起立塔像等の余行あり。下輩の文のなかに、また菩提心等の余行あり。なんがゆゑぞ唯だ念仏往生といふや。	問　上輩には念仏の他に捨家棄欲等の余行がある。中輩には起立塔像等の余行がある。下輩には菩提心等の余行がある。どうして唯だ念仏往生といえるのか。
答へていはく、善導和尚の『観念法門』にいはく、「またこの『経』(大経)の下巻の初めにのたまはく、〈仏(釈尊)、一切衆生の根性の不同を説きたまふに、上・中・下あり。その根性に随ひて、仏、みな専ら無量寿仏の名を念ぜよと勧めたまふ。その人命終らんと欲する時、仏(阿弥陀仏)、聖衆とみづから来りて迎接したまひて、ことごとく往生を得しめたまふ〉」と。この釈の意によるに、三輩ともに念仏往生といふ。	答　『観念法門』 一切衆生の根性の不同＝上中下 (修行能力に差がある) 修行能力に差がある一切衆生に専念無量寿仏名と勧めた 念仏する人の臨終には来迎 得往生
問ひていはく、この釈いまだ前の難を遮せず。なんぞ余行を棄ててただ念仏といふや。	問　余行と念仏で往生するのではなく、余行を棄てて唯だ念仏往生というのはなぜか。
答へていはく、これに三の意あり。 一には諸行を廃して念仏に帰せしめんがためにしかも諸行を説く。 二には念仏を助成せんがためにしかも諸行を説く。 三には念仏・諸行の二門に約して、おのおの三品を立てんがためにしかも諸行を説く。	答　諸行の説意 ①廃棄諸行　　帰入念仏せしむ ②諸行が念仏を助成することを示す ③念仏にも上中下、諸行にも上中下の差がある事を示す

Q　『大経』三輩章に往因は何が挙げられているのか。

A　念仏とその他菩提心等の諸行。

Q　法然聖人はどうして「三輩念仏往生」と念仏にかぎるというのか。

A　釈尊は三輩すべてに「専念弥陀仏名」と勧められた。一切衆生の根性に随ってともに念仏往生せしむ。

Q　余行を棄てよとは言われていないじゃないか。

A　諸行と念仏が説かれた説意は三義考えることができる。

一　(廃立)諸行を廃して　念仏に帰せしめんがために。

二　(助正)念仏を助成せんがために。

三　（傍正）各（おのおの）三品を立てんがため。

（内）の語は（『聖典全書』二巻1278頁）（『註釈版』七祖篇1220頁）

廃

Q　第一義の「（廃立）諸行を廃して　念仏に帰せしめんがために」の釈相如何。

A　釈尊が三輩段に諸行と念仏を説かれたのは、諸行を廃棄廃捨して、念仏を樹立するために。

Q　なぜそんなことがわかる？

A　念仏には「一向専念」といわれているからだ。

Q　「一向専念」とはどういう意味か。

A　余を兼ねざること。諸行を廃してただ念仏を用ゐるがゆゑに一向といふ。

Q　指南有りや。

A　「散善義」流通分　付属釈（『聖典全書』一巻792頁）（『註釈版』七祖篇500頁）

六に「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、遐代に流通せしめたまふことを明かす。上来定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

Q　それは『観経』のことで、『大経』三輩に関係ない。

A　元祖は『大経』三輩と『観経』九品は開合の異であるという。

Q　指南有りや

A　おそらく

（曇鸞大師撰）『略論安楽浄土義』三輩往生（『聖典全書』一巻558頁）

『無量寿経』の中には唯三輩有り、上中下なり。『無量寿観経』の中には一品の中を又分ちて上中下と為して、三々にして九なり、合して九品と為す。

Q　『大経』三輩と『観経』九品の行業は同じなのか。

A　同じ。

『往生要集』大文第九往生諸行（『聖典全書』一巻1200頁）（『註釈版』七祖篇1106頁）

（『観経』の行業を挙げたあと、）

『双巻経』の三輩の業も亦此を出でず。

Q　『大経』と『観経』の念仏と諸善を説明せよ。

A

『大経』三輩	『観経』	「玄義分」669	「散善義」流通分792
上輩 出家 菩提心 一向専念 諸功徳	日 水 地 宝樹 宝池 宝楼 華座 像 真身 観音 勢至 普 雑想	定 観察	
	（上上品） 三心 慈心不殺具諸戒行 読誦大乗方等経典 修行六念	散 行福	遇大凡夫
	（上中品） 不必受持方等経典善解義趣於第一義 心不驚動深信因果不謗大乗 上下品 信因果、不謗大乗 但発無上道心		一向専称弥陀仏名
中輩 在家 菩提心 一向専念	（中上品） 五戒、八戒斎 諸戒不造五逆無諸過患	戒福（出家）	遇小凡夫
	（中中品） 八戒斎、沙弥戒、具足戒	戒福（在家）	
	（中下品） 孝養父母行世仁慈	世福	
下輩 在家 無善 菩提心	（下上品） 聞十二部経首題名字 合掌称南無阿弥陀仏	念仏	遇悪凡夫
	（下中品） 説阿弥陀仏十力威徳広 説彼仏光明神力亦讃戒定恵解脱知見 此人聞已	聞法	
	（下下品） 具足十念称南無無量寿仏称	念仏	

Q　元祖の問答に基づいて問う。『大経』三輩には皆「念仏」といい、『観経』では下品ではじめて念仏が出てくる。開合になっていない。如何。

A　No。九品には皆念仏がある。下品の念仏はその一端を示しただけで、念仏は能力の優劣に随って上上品まで通ずる。

『往生要集』（下）にいはく、「問ふ。念仏の行、九品のなかにおいてこれいづれの品の摂ぞや。答ふ。もし説のごとく行ぜば、理上上に当れり。かくのごとくその勝劣に随ひて九品を分つべし。しかるに『経』（観経）に説くところの九品の行業はこれ一

端を示す。理実に無量なり」と。〔以上〕

Q　『観経』九品に念仏が通ずるという根拠は『観経』にあるか？

A　流通分　付属の文に『観経』の要点を示して、

仏、阿難に告げたまはく、「なんぢ、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」と。

Q　三輩と定善の扱いはどうなっているか。

A　善導大師は「定散両益を説くといへども」といって「持無量寿仏名」を付属するといっている。法然聖人は三輩と九品が開合の意であるという。また、付属章には定散の諸善と念仏を対比されている（『聖典全書』一巻1314頁）。宗祖は「化身土文類」に『大経』三輩の文をさして「『観経』の定散九品之文是也」としている。

この義は後に宗祖の義相で論ずる。

助

Q　第二義「（助正）念仏を助成せんがために」の釈相如何。

A　釈尊が三輩段に諸行と念仏を説かれたのは、諸行が念仏を助成することを説き、正業を示すためであった。

Q　何が助けるのか。

A　二義ある。（『聖典全書』一巻1277頁）（『註釈版』七祖篇1218頁）

一には同類の善根をもつて念仏を助成す。

二には異類の善根をもつて念仏を助成す。

●同類の善根①（正は本願、助は非本願）

Q　同類とはどういう意味か。

A　助・正ともに正行という同一の類であるような助正を指す。

Q　正行とは何か。

A　「二行章」の初めに就行立信釈を引用されている。曰く

「散善義」就行立信釈（『聖典全書』一巻767頁）（『註釈版』七祖篇463頁）

『選択集』二行章（『聖典全書』一巻1259頁～）（『註釈版』七祖篇1192頁～）

正行

『観経疏』の第四（散善義）にいはく、「行につきて信を立つといふは、しかも行に二種あり。一には正行、二には雑行なり。

正行といふは、もつぱら往生の経によりて行を行ずるもの、これを正行と名づく。いづれのものかこれや。

一心にもつぱらこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等を読誦し、

一心にもつぱら思想を注めてかの国の二報荘厳を観察し憶念し、

もし礼せばすなはち一心にもつぱらかの仏を礼し、

もし口称せばすなはち一心にもつぱらかの仏を称し、

もし讃歎供養せばすなはち一心にもつぱら讃歎供養す。

これを名づけて正となす。

またこの正のなかにつきて、また二種あり。

正定業　一には一心にもつぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるがゆゑに。

助業　もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす。

Q　「三輩章」で同類の助成はどう説明されているか。

A　初めに同類の助成とは、善導和尚の『観経疏』の中に五種の助行を挙げて念仏一行を助成する也。具に上の正雑二行の中に説くが如し。

Q　五種の助行とは？

A　正行を五つに開いた前三後一。

往生行
- 正行
  - 開
    - 読誦
    - 観察
    - 礼拝
    - 称名
    - 讃歎供養
  - 合
    - （能助）助業　（1260）
      - 第四の口称を除きての外
      - 読誦等の四種を以て而も助業とす
    - （所助）正定之業
      - 上の五種の中の第四の称名を以て
      - 正定之業とす
- 雑行　「此の正助二行を除きて已外、自余の諸善を悉く雑行と名く」（1261）

Q　四つじゃないか

A　元祖は讃嘆と供養を分けて、六種の正行のうちの五種を助業と表現することもある。

（文証）二行章（『聖典全書』一巻1260頁）（『註釈版』七祖篇1193頁）

若し讃嘆と供養開して二とせば、六種正行と名くべし。

Q　称名正定業なる理由は？

A　本願に誓われた行業だから。正決定なる理由は正選定だから。

正しく往生行として選定された行業だから。

Q　前三後一が正定業でない理由は？

A　非本願の行の故に。

Q　同類の助正義のうえで、三輩章に念仏と余行が説かれている理由は？

A　本願に誓われている称名で往生することをあらわし、非本願の余行は往因に関与しないことを明かす。

Q　それを適示する法然聖人の文証如何。

A　三選の文（『聖典全書』一巻1324頁）（『註釈版』七祖篇1285頁）

欲修於正行
正助二業中
猶傍於助業
選応専正定
正定之業者
即是称仏名
称名必得生
依仏本願故

Q　「助業を傍らにする」とはどういう状況か。

A　廃捨の意。

Q　そばにあるんじゃないのか。
A　閣と同じでさしおくこと。
（文証）『尊号真像銘文』（『註釈版』666頁）
「欲修於正行正助二業中猶傍於助業」といふは、正行を修せんと欲はば、正行・助業二つのなかに助業をさしおくべしとなり。

●同類の善根②（正助の名目）

Q　同類の善根は何を助けるのか？
A　称名の相続起行を助成する。助業は称名に助伴して豊かに念仏生活を荘厳する。
Q　往因を助けるのではないのか。
A　往因は称名正定業のひとりだちであって、助けは要らない。
『和語灯録』諸人伝説の詞25（『聖典全書』六巻611頁）
本願の念仏にはひとりだちをさせて助をささぬなり。助さすほどの人は極楽の辺地にむまる。
Q　助けが要らないのであれば正助という名目は成り立たないじゃないか。
A　その通り。助正という名目は、安心門（廃立義）では成り立たない。起行門から立った名目である。
ゆえに法然聖人は雑行に対して五正行全体に五番の徳を認められている。
『選択集』二行章　二行得失（『聖典全書』一巻1262頁～）（『註釈版』七祖篇1196頁）
正行と雑行の得失を明かして「正助二行を修する者は」といって
親疎対、近遠対、無間有間対、不回向回向対、純雑対を示される。
Q　やはり五正行全体が往因で、そこに正助の関係があるんじゃないか？
A　いいえ。往因は安心門で語るのでその行業は称名のみ。正助の関係は認めない。ただし、安心相続の起行においては正助がある。
Q　指南有りや
A　『往生礼讃』前序（『聖典全書』一巻912頁）（『註釈版』七祖篇654頁）
安心門　三心（至誠心・深心・廻向発願心）
二種深信　煩悩具足の凡夫が本願の称名を決定往生の行と信ずる
（略讃のみ）
起行門　五念門
身業礼拝門
口業讃嘆門　（広讃のみ）
意業憶念観察門
作願門
回向門
作業門　四修
恭敬修
無余修
無間修
長時修

・起行門とは安心門に於いて確立した念仏往生の信心が相続して行を起こしていくこと。
・作願・観察二行の順序を変えることによって止観中心の菩薩行でないことを示す。凡夫相応の起行であることを示す。
・作願・回向を合わせることによって、発願回向(回向発願心)に同致せしめる。
・讃嘆門下の略讃称名を安心門に取り出して、五念門全体を、念仏往生の信心の相続行としての宗教儀礼として転用されたものである。
・作業門とは、起行における能修の心相と修相を四修として示したものである。

真宗の儀礼の基礎となっている『法事讃』802には

専称名号・兼誦弥陀経
三因・五念
正・助・四修

という位置づけをして、儀礼を作り上げている。

Q　正助の関係はどこにある？

A　安心門が正。起行門が助。

『往生礼讃』日中讃（『聖典全書』一巻952頁）（『註釈版』七祖篇704頁）

起行門　五門　相続して　安心門　三因　を助く

Q　往因を助けるのではないか？

A　称名を中心として、前三後一の助業をもって、念仏生活を荘厳する宗教儀礼を行っていく。助業は念仏生活を荘厳するという意味で念仏を扶助するといってもいいし、念仏を中心として統合された宗教儀礼という意味で随伴といってもいい。

Q　起行門の内容は？

A　身口意の三業を挙げて発願回向（安心）の生活をすること。

Q　具体的には？

A　『和語灯録』巻五　「一百四十五箇条問答」（『聖典全書』六巻577頁～）

身業礼拝
口業讃嘆　　読経　第19条（毎日十五巻読めば二十年で十万巻）、
第44条（問　経千部読むべきか？　答え　さも候まじ）
126（没後に読経は？一定にて候、すべく候。）
12、32、33、43、47、93、113、114条にも
称名　第18条（念仏の数、一万から十万まで、御心にまかせて）
11、13、143条
意業観察　　乱心　第7条（乱心は凡夫の習い。ただ心を一にして、よく御念仏）
第104条（腹の立つ心、乱心はわろきこと。かまえて一心に念仏しなさい）

Q　三輩章の同類助正は廃立を明かすのか、起行を明かすのか？

A　名目は起行から立ったものであるが、のちに助正の義は棄てられるので、廃立を明かすものとみる。

『法事讃』（『聖典全書』一巻802頁）（『註釈版』七祖篇508頁）

ただおもんみれば、如来の善巧総じて四生を勧め、この娑婆を棄てて極楽に生ずることを欣はしめ、もつぱら名号を称し、兼ねて『弥陀経』を誦せしめたまふ。かの〔浄土の〕荘厳を識り、この〔娑婆の〕苦事を厭ひて、三因・五念畢命を期となし、正助・四修すなはち刹那も間なく、この功業を回してあまねく含霊に備へて、寿尽くれば台に乗じて斉しくかの国に臨ましめんと欲すればなり。

●廃捨される異類の善根

Q　異類の善根とは如何。

A　此土入聖を目的とした修行を異類といい、先の正行を除いた諸行を異類の助業という。

Q　『大経』三輩段では何が異類の助業か。

A　上輩　捨家棄欲而作沙門　発菩提心

中輩　起立塔像・懸繒・燃灯・散華・焼香等の諸行

（起立塔像飯食沙門懸繒然灯散華焼香）

『要集』助念方法方処供具等（『聖典全書』一巻1114頁）（『註釈版』七祖篇967頁）

下輩　発心（発菩提心）

Q　『要集』助念方法　とはどのようなものか？

A　方処供具等（『聖典全書』一巻1113頁）（『註釈版』七祖篇966頁）

【47】　大文第五に、助念方法といふは、一目の羅は鳥を得ることあたはず、万術をもつて観念を助けて、往生の大事を成ず。

Q　方処供具を説明せよ。

A　（『註釈版』七祖篇966頁）

【48】　第一に方処供具とは、内外ともに浄くして一の閑処を卜めて、力に随ひて香華供具を弁ぜよ。もし華香等の事を闕少せることあらば、ただもつぱら仏の功徳威神を念ぜよ。

もし親しく仏像に対はば、すべからく灯明を弁ずべし。もしはるかに西方を観ぜば、あるいは闇室を須ゐよ。［感禅師は闇室を許す。］

もし華香を供する時には、すべからく『観仏三昧経』の供養の文の意によるべし。その得るところの福、無量無辺なり。煩悩おのづから減少し、六度おのづから円満す。［その文、通途の所用に異ならず。ゆゑにさらに抄せず。］

もし念珠を用ゐん時には、浄土を求めん

淺田恵真和上『往生要集講述』290頁

第一には念仏道場に関しての、方角と場所・供え物と道具について。修行道場の内と外をともに清浄にして、一つの静かな場所を定めて、自分の力量に応じて花や香、供え物や荘厳具を用意しなさい。もし花や香などを供えることができないならば、ただ専らに、仏の功徳と仏の威神力を念じなさい。

もし目の当たりに仏像に対峙しようとするのであれば、灯明を献じなければならない。もし遥かに西方の浄土を観じようとするのであれば、暗い部屋を使用するのも良い。《懐感禅師は闇室を許している》。

もし花や香を供えようとする時には、『観仏三昧経』の供養の文を唱える必要がある。このような供養によって無量無辺の功徳が得られ、煩悩が少しずつ無くなっていき、六波羅蜜の修行も自然と円満に成就する。《その経文は、普段に用いられているものと何ら変わらないので、ここでは殊更に引用しない》。

もし念珠を使用する場合、浄土往生願生を目的と

と欲はば、木槿子（もくげんし）を用ゐ、多功徳を欲はば、菩提子、乃至、あるいは水精・蓮子等を用ゐよ。[『念珠功徳経』に見えたり。]

するのであるならば、無患子（むくろじ）を使用しなさい。また、多くの功徳を望むならば、菩提樹の実、あるいは水晶の玉、蓮の実などを使用しなさい。《『念珠功徳経』を参照しなさい》

・下輩も准じて知るべし。

Q　出家・発菩提心がどうして念仏の助けになるのか。

A　出家・発心は仏道のスタートである。念仏はずっと修するものである。出家・発心は念仏をさまたげるものではない。

就中出家・発心等は、しばらく初出および初発を指す。念仏はこれ長時不退の行、むしろ念仏を妨礙すべけんや。（『聖典全書』一巻1278頁）（『註釈版』七祖篇1219頁）

Q　出家し、菩提心を発こさないと念仏が成立しないのか？

A　同類の助業で明かしたように往因は称名正定業のひとりだちであって、助けは要らない。第十八願には称名のみ誓われている。しかし、念仏は出家・発菩提心の助けを必要とすると考える人は如来正選定の称名を受け取っていない。

『和語灯録』諸人伝説の詞25（『聖典全書』六巻611頁）

本願の念仏にはひとりだちをさせて助をささぬなり。助さすほどの人は極楽の辺地にむまる。

Q　諸行は念仏の何を助けるのか。

A　往生の業因を助けると見れば廃捨すべき行業。安心の上の起行ならば念仏生活を助ける。

Q　非往生行を往生の助けにできるのか。

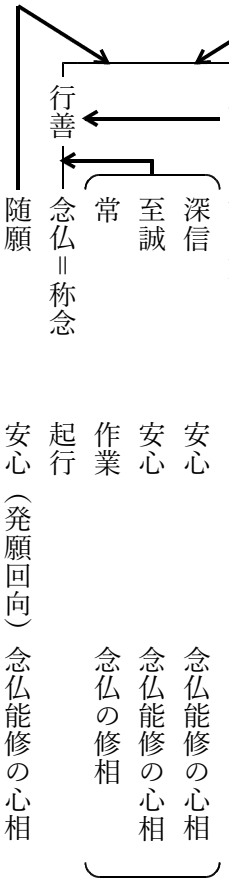
A　願によって行業の方向性は転ずることができる。

『要集』助念方法　総結要行（『聖典全書』一巻1152頁）（『註釈版』七祖篇1031頁）

業は願に由りて転ず

Q　『往生要集』の釈相如何。正助を示せ。

A　念仏を他の六法が扶助していくという構造。



大菩提心・随願は止善と行善を扶助する。

悪業を止めるという消極的な善によって三業が護られ、積極的に善を修することを助けていく。

深信・至誠・常は称名念仏一行に統摂される能修の心と修相である。

○（参考）『往生要集』の念仏は念観両通

大文第四正修念仏、大文第五助念方法に見える。正修念仏の観察門雑略観には

若し相好を観念するに堪へざることあらば、或いは帰命の想に依り、或いは引摂の想に依り、或いは往生の想に依りて、一心に称念すべし。［以上、意楽不同なり。故に種々の観を明かす。］

（『聖典全書』一巻1108頁）（『註釈版』七祖篇957頁）

といい、大文第五助念方法第二修行相貌には問答を設けて

問ふ。念仏三昧は、唯だ心に念ずとやせむ、亦口に唱ふとやせむ。

答ふ。『止観』の第二に云ふが如し。「或いは〔唱念〕倶に運び、或いは先づ念じ後に唱へ、或いは先づ唱へ後に念じて、唱・念相継ぎて休息する時無し。声々念々唯阿弥陀に在り」と。

（『聖典全書』一巻1117頁）（『註釈版』七祖篇972頁）

示された。したがってここでいう「観念」は正修念仏の観察門、「称念」は相好観念不堪の者に示される称（唱）と念（想）としなければならない。

●弘願異類助業　安心決定の上は雑行も助業となる

Q　往因に関わらない異類の助業がありや。

A　ある。諸行は安心が確立した上で念仏者の宗教的実践・日常生活の規範を助けていく。

Q　文証

A『西方指南抄』巻下本　十一箇条問答　第三条（『聖典全書』三巻1020頁）

〔三〕

問。餘佛・餘經につきて善根を修せむ人に、結縁助成し候ことは雑行にてや候べき。

答。我こゝろ、彌陀佛の本願に乗じ、決定往生の信をとるうえには、他の善根に結縁し助成せむ事、またく雑行となるべからず、わが往生の助業となるべき也。他の善根を隨喜讃嘆せよと釋したまへるをもて、こゝろうべきなり。

Q　どのような行か。

A　『和語灯録』巻五　「一百四十五箇条問答」（『聖典全書』六巻577頁～）

廃悪修善　145廃悪修善は、諸仏の通戒なり。それにはそむきたる身

『和語灯録』巻四　「十二箇条問答」11（『聖典全書』六巻574頁）

ほとけは悪人をすて給はねども、このみて悪をつくる事、これ仏の弟子にはあらず。一切の仏法に悪を制せずといふ事なし。

以下『和語灯録』巻五　「一百四十五箇条問答」（『聖典全書』六巻577頁～）

持戒　28たとひのちにやぶれ候とも、その時たもたんとおもふ心にて、たもつと申すはよき事にて候。

97六斎に、にら・ひる、いかに。答。めさざらんはよく候。

77答。ひるも香うせなば、はばかりなし。

57飲酒は罪か？答。ま事にはのむべくもなけれども、この世のならひ。

58肉食は罪か？答。ただおなじ。

布施　141往生のため衣食を施すこと、めでたき功徳にて候。

起立塔像
然灯散華
飯食沙門
読誦雑行

1塔堂修理するのは悪いことではない。功徳だ。
『拾遺語灯録』東大寺十問答5（『聖典全書』六巻657頁）
浄土のゆかしさに造像し真仏の思いをなすは功徳
46花香　かならずまいらせ候。
142破戒の僧、愚癡の僧、供奉せんも功徳
8経の陀羅尼は、潅頂の僧にうけ候べきか。
答。『法華経』のはくるしからず
63錫杖は歩くとき虫のために誦し候へ

●弘願異類助業　衣食住も何事も念仏生活を助ける

『和語灯録』諸人伝説の詞27（『聖典全書』六巻611頁）

又いはく、現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。……

ひじり・妻をまうけて

住所・流行

自力の衣食・他人にたすけられて

一人・同朋とともに……

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち、自身安穏にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。

……　もし念仏の助業とおもはずして身を貪求するは三悪道の業となる。

極楽往生の念仏申さんがために自身を貪求するは、往生の助業となるべき也。万事かくのごとし。

●助正のまとめメモ（山上の意見）

『選択集』三輩章では最終的に正助の義は採用しなかった。

助正のどこに問題があったのか整理する。

助正を示すために諸行が説かれたとすれば、真実義を説かねばならない。

助業に往因があれば真実ではない

助業	「散善義」	『礼讃』	『大経』	『要集』	十一箇条	諸人伝説
行体	読誦 観察 礼拝 讃嘆供養	身業礼拝門 口業讃嘆門 意業憶念観察門 作願門 回向門	出家 発菩提心 持戒起立塔像 等	大菩提心 護三業 深信、至誠、 常 と　随願	餘佛餘經、 他の善根 に結縁し 助成	衣食住 何事も
類	同類		異類			
真仮	方便	真実	方便		真実	
往因か	非往因	非往因	往因を助ける		非往因	
助業の分斉	非本願　廃	起行門	念仏を助ける		起行門	
正定業	本願の行　立	安心門	助を必要とする往因		安心門	

同類の助業

正助の名目は弘願起行から立ったもので、助業は往因に関与しない。この名を業因門（安心門）で使うので、廃捨すべき業に往生の助因を見込む危険性がある。選択本願の枠組みが壊れる。

異類の助業

『大経』三輩の諸行は念仏と縁を結ぶ入門初縁としては障げとならない。また、諸行は安心が確立した上で念仏者の宗教的実践・日常生活の規範を助けていく。しかし往生の助因を見込むならば、称名は助を必要とする往因となって選択本願の枠組みが壊れる。

傍

Q 第三義の文を読め。文意如何。

A

本文	メモ
三に、念仏・諸行に約して、おのおの三品を立てんがためにしかも諸行を説くといふは、 　先づ念仏に約して三品を立つとは、いはくこの三輩のなかに、通じてみな「一向専念無量寿仏」（大経・下）といふ。これすなはち念仏門に約してその三品を立つ。 ゆゑに『往生要集』（下）の念仏証拠門にいはく、 『『双巻経』（大経）の三輩の業、浅深ありといへども、しかも通じてみな〈一向専念無量寿仏〉といふ」と。 ［感師（懐感）これに同じ。］ 次に 　諸行門に約して三品を立つとは、いはくこの三輩のなかに通じてみな菩提心等の諸行あり。これすなはち諸行に約してその三品を立つ。 ゆゑに『往生要集』（下）の諸行往生門にいはく、 『『双巻経』（大経）の三輩また此を出でず」と。〔以上〕	各々の修行は上中下に通じて成立する 『大経』三輩に通じて念仏が説かれる。 『往生要集』大文第八　念仏証拠門 『大経』三輩に通じて菩提心等の諸行が説かれる。 『往生要集』第九往生諸行門 1200 此＝直前の『観経』三福九品

Q 各立三品とはどういうことか。

A 念仏も諸行も上中下に通じて成立する。

Q 念仏が三輩に通ずる根拠は？

A 『大経』に三輩通じて〈一向専念無量寿仏〉と説かれてある。

Q 念仏の上中下の行相如何。

A 一には観念の浅深。二には念仏の多少。

「利益章」（『聖典全書』一巻1280頁）（『註釈版』七祖篇1223頁）

若し念仏に約して三輩を分別せば、これに二の意あり。

一には観念の浅深に随ひてこれを分別す。

二には念仏の多少をもつてこれを分別す。

浅深は上に引くところのごとし。「もし説の如く行ぜば、理上上に当れり」是也。

次に多少は、下輩の文の中に既に十念乃至一念の数あり。上・中の両輩は此に准じて随ひて増すべし。『観念法門』に云く、「日別に念仏一万遍、また須く時に依りて浄土の荘厳を礼讃すべし。太精進すべし。或いはは三万・六万・十万を得る者は、皆是上品上生の人なり」と。まさに知るべし、三万已上は是上品上生の業、三万以去は上品已下の業なり。既に念数の多少に随ひて品位を分別することこれ明らけし。

観念の浅深

『往生要集』大文第十　問答料簡（『註釈版』七祖篇1134頁）

問ふ。念仏の行は、九品のなかにおいては、これいづれの品の摂ぞ。答ふ。もし説のごとく行ずるは、理、上上に当れり。かくのごとくして、その勝劣に随ひて九品を分つべし。しかも『経』（観経）の所説の九品の行業は、これ一端を示すなり。理、実には無量なり。

念仏の多少

下　十念乃至一念

中　三万以去

上　三万已上

Q　諸行が三輩に通ずる根拠は？

A　『大経』三輩は三輩に通じて菩提心等の諸行が説かれ、『観経』の三福九品からはみ出すことはないから。

『往生要集』大文第九往生諸行（『聖典全書』一巻1200頁）（『註釈版』七祖篇1106頁）

（『観経』の行業を挙げたあと、）

『双巻経』の三輩の業も亦此を出でず。

Q　『往生要集』第九往生諸行門とはどのような章か？

A　第八念仏証拠門で念仏一行の往生を説いたが、極楽を求める者は必ずしも念仏のみを修するわけではない。余行はおのおののねがいに任せて修すればよい。という章。

【67】　大文第九に、往生諸行を明かさば、いはく、極楽を求むるものは、かならずしももつぱら仏を念ぜず。すべからく余の行を明かしておのおのの楽欲に任すべし。

（『聖典全書』一巻1196頁）（『註釈版』七祖篇1100頁）

Q　次の三義をまとめた文の第三義を読め。

A　（『聖典全書』一巻1279頁）（『註釈版』七祖篇1220頁）

「後の義はすなはちこれ傍正のために説く。いはく念仏・諸行の二門を説くといへども、念仏をもつて正となし、諸行をもつて傍となす。」

Q　各立三品ならば傍正の関係は逆でもいいんじゃないか。

むしろ諸行が正で念仏が傍という方が一般的じゃないか。

A　ダメ。『往生要集』第八念仏証拠門が各立三品しながら念仏往生を勧めている。

Q　説明せよ。

A　『往生要集』第八念仏証拠門（『聖典全書』一巻1193頁）（『註釈版』七祖篇1096頁）は念仏往生を勧める証拠となる経文を集めたもので、問答が設けられている。この問答と証拠の引文が各立三品と念仏往生を勧める内容になっている。

本文	メモ
【66】　大文第八に、念仏証拠といふは、問ふ、一切の善業はおのおの利益あり、おのおの往生することを得てん。	（各立三品）一切の善業にはそれぞれ利益があって、その利益によって往生することができるのに、
なんがゆゑぞ、ただ念仏の一門を勧むる。	（勧念仏）どうして念仏のみを勧めるのか。
答ふ。いま念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにはあらず。	（各立三品）念仏を勧めるのは余の妙行を否定するものではない。
ただこれ、男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜずして、これを修するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その便宜を得たるは念仏にはしかじ。	（勧念仏）男女、貴賤、行住座臥、時処処縁を問わない。不難。臨終願求も往生。

1194

二には、『双巻経』（大経・下）の三輩の業、浅深ありといへども、	（各立三品）
しかも通じてみな「一向にもつぱら無量寿仏を念じたてまつれ」とのたまへり。	（勧念仏）
三には、四十八願のなかに、念仏門において別に一の願を発してのたまはく（同・上意）、「乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ」（第十八願）と。	

Q　元祖の釋はあるのか。

A　「利益章」（『聖典全書』一巻1280頁）（『註釈版』七祖篇1222頁）

機に随ひて一往菩提心等の諸行を説きて、三輩の浅深不同を分別す。しかるをいま諸行においてはすでに捨てて歎めたまはず。置きて論ずべからざるものなり。ただ念仏の一行につきてすでに選びて讃歎す。思ひて分別すべきものなり。

Q　廃助傍のいずれを取るのか。文を読め。

本文	メモ
おほよそかくのごときの三義不同ありといへども、ともにこれ一向念仏のための所以なり。	三義ともに「釈尊は念仏を勧めるために諸行を説いた」

初めの義はすなはちこれ廃立のために説く。いはく諸行は廃せんがために説く、念仏は立せんがために説く。 次の義はすなはちこれ助正のために説く。いはく念仏の正業を助けんがために諸行の助業を説く。 後の義はすなはちこれ傍正のために説く。いはく念仏・諸行の二門を説くといへども、念仏をもつて正となし、諸行をもつて傍となす。 ゆゑに三輩通じてみな念仏といふ。 ただしこれらの三義は殿最知りがたし。請ふ、もろもろの学者、取捨心にあり。 いまもし善導によらば、初めをもつて正となすのみ。	廃立 助正 傍正 三義の優劣は知りがたいが、善導大師のご指南によって、初めの廃立の義を取る。

諸橋大漢和辞典「殿」

【殿最】32 デンサイ 功勞及び成績を調べて、上功を最といひ、下功を殿といふ。軍功・考課の差等に用ひる語。〔漢書、宣帝紀〕歳竟、丞相御史、課二其殿最一以聞。〔注〕師古曰、凡言二殿最一者、殿、後也、課居レ後也、最、凡要之首也、課居レ先也。〔漢書、敍傳〕猶無レ益二於殿最一。〔後漢書、光武帝紀〕但取二獲賊一多少爲二殿最一。〔班固、答賓戯〕猶無レ益二於殿最一也。〔注〕善曰、漢書音義曰、上功曰レ最、下功曰レ殿。〔白居易、二十三議二鹽法之弊一〕何者今之主者、歳考二其課利之多少一而殿最焉、賞罰焉。「原。

殿＝劣・下功、最＝優・上功

②『漢語灯録』「大経釈」の義

（『聖典全書』六巻311頁）

三三輩中、上輩「一向専念無量壽」（大経下）者、上以二一文雖明念佛往生義、未分其品秩。故今開一念佛爲三品、以分其品秩。此有二意。一付念佛往生有三品、捨中下爲令欣上品、分品秩。二爲使①行者知自念佛位分齊。一捨中下欣上品者云云。二知次位者云云。　問。見今三輩之文、念佛之外說諸行業。何唯謂念佛哉。所以上品中、念佛外擧出家・受戒・發心・修諸功德。中品中、念佛外說菩提心及齊戒等善。下品中、念佛外說發菩提心。何故唯云念佛往生乎。答。此問最可然。佛意難測②、凡下輒難解。然今依善導等意、今案此文略有二意。一但念佛往生、二助念佛往生。一但念佛者、凡論三品之義事者、本付一法論之、如九品煩惱等。今往生之行、亦可然。何必付行多少、論三品。故今付本願念佛行、說三品往生之旨也。以何知之、三品文共於念佛置一向之言。謂上品（大経下）說「一向専念③無量壽佛」、乃至下品（大経下）說「一向専念無量壽佛」。凡准④餘所、云一向者不兼餘行意也。故今付念佛立三品、分別品秩也云云。此亦非私義。故善導釋（觀念法門）云、「此『經』下卷初云、佛說一切衆生根性不同、有上・中・下。隨其根性、佛皆勸專念無量壽佛名。其人命欲終時、佛與

（312頁）

聖衆自來迎」。依釋意、三輩共云念佛往生也。　問。曰、此釋未遮前難、何棄餘行唯云念佛乎。答。云、此有三意。一爲廢諸行歸於念佛而說諸行也。二爲助成念佛而說諸行也。三約念佛・諸行二門、各爲立三品而說諸行也。一爲廢諸行歸於念佛而說諸行者、准云

「三輩章」（『聖典全書』一巻1277頁）（『註釈版』七祖篇1217頁）

しかるに本願のなかにさらに余行なし。三輩ともに上の本願によるがゆゑに、「一向専念無量寿仏」（大経・下）といふ。

Q　『大経釈』で三輩の念仏と諸行についての釈義如何。

A　二問答を設けられる。

Q　第一の問いは？

A　問う。今三輩の文を見るに、念仏の外に諸の行業を説く。何ぞ唯念仏と謂ふ哉。所以に上品の中に念仏の外に出家・受戒・発心・修諸功徳を挙げたり。中品の中に念仏の外に菩提心及び斎戒等の善を挙げたり。下品の中に念仏の外に発菩提心を説けり。何が故ぞ唯念仏往生と云うや。

Q　答えは？

A　善導等の意によって二義挙げる。一には但念仏往生、二には助念往生。

Q　第二の問答は？

A　同じ問いを出して、答えに三義挙げる。

一には諸行を廃して念仏に帰せんが為にしかも諸行を説く也。

二には念仏を助成せんが為にしかも諸行を説く也。

三には念仏・諸行の二門に約して、各の三品を立てんが為にしかも諸行を説く也。

Q　『選択集』との違いはどこか。

A　第三義に「傍正」の名が無く、「各立三品」を証して「諸行往生の義」と判じられる。

Q　「傍正」は言わないのか。

A　今の第一義を正とし、第二義第三義を傍とする。傍は所廃の法。

一　廃諸行　「散善義」流通分の意　　正

帰念仏　一向専念無量寿仏

二　諸行は念仏を助成する

同類の善根　「散善義」就行立信

（所助）称名

（能助）助業

異類の善根　『往生要集』

（所助）正修念仏の五念門

（能助）助念方法の七法の念仏を除く六　　傍

三　念仏と諸行　各立三品

諸行往生に三品　『大経』三輩章、『往生要集』諸行往生

念仏往生に三品

一約返数多少　『観念法門』

二約時節長短　『阿弥陀経略記』（源信）

三約観念浅深　明示されていないが『往生要集』

③廃立の論拠

Q　「念仏＝正、助念・諸行＝傍」とは何を根拠に言うのか

A　弥勒に付属されたのは念仏（「其得得聞彼仏名号歓喜踊躍乃至一念」）だから。

『漢語灯録』「無量寿経釈」（『聖典全書』六巻315頁）には弥勒付属の文意を明かして、助念及び諸行を廃して但念仏を明かす文であるとした。

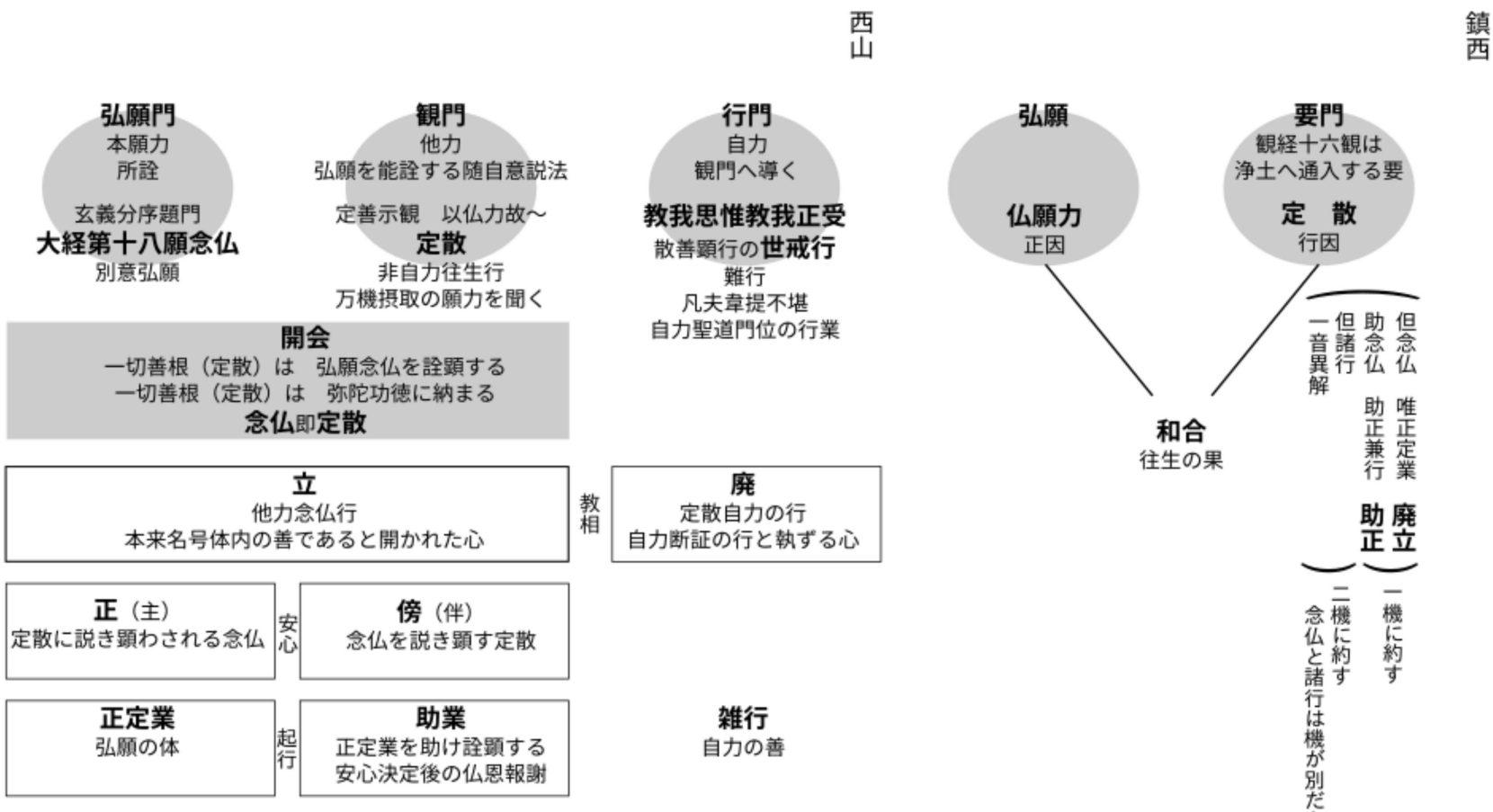
二ニハ此ハ廃シテ二上ノ助念及ビ諸行ヲ一明ニ但念仏一故ト者、上ノ本願ノ願成就ノ文ニ雖二明但念仏一ヲ、上ノ来迎ノ願等ノ中及ビ次ノ三輩文明二助念ノ往生・諸行ノ往生一ヲ。

立　　但念仏　　本願願成就文

廃　　助念往生　諸行往生　　来迎の願等　三輩

特留此経の段（『聖典全書』六巻323頁）の最後にも傍正を明かしている。

今此の『経』の中に委く之を尋ぬれば、傍正に於いて之を論ずれば、念仏を正とす。諸行を以て傍とす。故に知んぬ、往生の行は念仏を以て正とす。諸行を以て傍とす。然れば則ち今の行人傍を捨て正を行ふを為せ。



梯實圓和上『法然教学の研究』94頁125頁347頁参照

①鎮西義

良忠『選擇傳弘決疑鈔』巻第三　三輩念佛往生之文（『浄全』七巻251頁a）
浄土宗全書・法然上人伝　検索システムhttp://www.jozensearch.jp/

祖師『大経の釋』に云く、「往生の業を修するに三意有り。一に但念仏、二に助念仏、三に但諸行也」已上。

口伝に云く「復た一義有り。仏に一音異解の徳を備わるるが故に、一向の聴機に随て同じからず。『維摩』に云く「仏一音を以て法を演説す。衆生類に随て各解を得」已上

若し余行の機は各己業に随て一向の音を聞く。然るに結集は仏の本意に約して専念の上に一向の言を置く。実には諸行に通ずべし。故に機教相違の過無しと。

上来四義の中に前の二義は各一機に約す。謂く第一は唯正定業の機に約し、第二は助正兼行の機に約す。第三第四は通じて二機に約す。謂く念仏と諸行とその機別なるが故に。

「殿最」とは漢書の音義に云く「上功を最と曰ふ。下功を殿と曰ふ。

「若し善導に依らば初めを以て正とす。」とは、大師広く三福各生と判ぜるは是傍正の義なり。又念仏の行者に就いて菩提心及び斎戒等を勧むるは是助正の義なり。然りと雖、弥陀の本願、釈尊の教意、諸仏の証誠、正しく念仏を勧む。故に和尚深く経の元意を探りて、且く余行を廃して偏に念仏を勧む。末法の機をして決定して一行の出離に更に不足無きことを信知せしむ。是の故に廃立を正とするのみ。而已

但念仏　唯正定業　廃立　一機に約す
助念仏　助正兼行　助正
但諸行　二機に約す
一音異解　（念仏と諸行と機が別だから）

一音異解　「一向」という仏語を機は各々の己の業に随って聞く。諸行の人にもこの仏語は届いているのだから、機教相違の過ちはない。

善導の決定信知の義によって廃立義を正とする。

要門（http://jodoshuzensho.jp/daijiten からコピペ）

浄土に通入する肝要の門の意。『観経』十六観に説かれるそれぞれの行が、浄土に通じる要となるから要門という。弘願ぐがんの対。良忠の『伝通記』に「要とは肝要、門とは通入なり。謂く一一の行は各おの浄土に通ずる要なり。故に要門と云う」（浄全二・一二九下／正蔵五七・五二三中～下）とある。これは『観経疏』玄義分の「娑婆の化主は、その請に因るが故に、

すなわち広く浄土の要門を開き、安楽の能人は、別意の弘願を顕彰したまう。その要門とは、すなわちこの『観経』の、定散二門これなり」（聖典二・一六二／浄全二・二上）に基づく。この要門における念仏と諸行の関係、さらには要門と弘願の関係について、良忠は『伝通記』玄義分記三や『東宗要』一の中で触れている。それによると、要門の定散には念仏を含み、その行業の上に仏願力が加わるのを弘願としている。そして、要門である定散二善を往生の行因とし、弥陀の弘願を往生の正因とし、この因縁が和合することによって往生の果を得るとしている。西山派では行門・観門・弘願門を立て、そのうちの観門が要門にあたる。真宗では要門・真門・弘願門を立て、念仏以外の諸行往生を願うのを要門としている。

②西山義

行門・観門（要門）・弘願門（http://jodoshuzensho.jp/daijiten からコピペ）

証空が善導の著書を注釈する際に用いた名目（術語）。特に『観門要義鈔』『観経疏大意』等の初期の著書に用いている。

行門とは自力修行の法門のことである。釈尊一代に説く大小乗の諸経は自力修行によって仏果を期する教えである。しかし、煩悩具足の凡夫はこの行門を成就することはできない。行門はただ凡夫に対して観門へと機を調え導く異方便としてのみ意義をもつ。

観門とは『観経』に説かれる定散二善十六観の法門のことである。いわゆる観門は自力修行の法門ではなく、弘願を能詮する教えであり、観門は弘願を領納する手立てである。さらには観門は弘願と不二一体の開会の関係ともなる。

弘願とは阿弥陀仏の本願力のことであり、凡夫はこの弘願により救済されるのである。この名目の関係は弘願により観門が開かれ、さらに行門が開設されるという教法の施設の立場がある。また、行門を離れて観門より弘願門に帰するという機の入信の立場がある。証空はこの両面から阿弥陀仏による凡夫救済の原理を明かしている。

【参考】上田良準・大橋俊雄『浄土仏教の思想』一一（講談社、一九九二）

【執筆者：中西随功】

行観『選択集秘鈔』巻二（『浄全』八巻375頁b）

Q　西山の廃助傍の釈義如何。

A　廃立は教相。傍正は安心。助正は起行。

Q　廃立の義相如何。

A　行門の扱い。自力を捨てて他力の観門へと機を調え導く異方便。

三輩に諸行と念仏が説かれたのは共に、定散自力の行を廃捨して、他力念仏の行を立てるための異の方便である。

Q　行についてのみ、廃立するのか。

A　行を廃立するということは、機や身土にも廃立の義は行き渡る。

廃　難行　聖道　根性利者　自力安心

立　易行　浄土　鈍根無智者　他力安心

Q　傍正の義相如何。

A　三輩に諸行と念仏が説かれるのは、観門（要門）の立場である。

Q　観門（要門）とはどういうものか。
A　定散二善十六観は弘願念仏を能詮する教え（異方便）。定散の諸行は念仏を顕す。
Q　定散二善十六観はどのように弘願を能詮するのか。
A　定散二善は一切衆生に浅機深機あることを示して、万機隔てなく摂取したまう弥陀の願力を明らかにする。
Q　弥陀の願力を聞いた者はどうなるのか。
A　一切善悪凡夫を得生せしむる願力を聞く者は、願力に乗じて即便往生する。
（文証）『観念法門』五縁五功徳分摂生縁（『聖典全書』一巻892頁）（『註釈版』七祖篇630頁）
　またこの『経』（大経）の上巻（意）にのたまはく、「もし衆生ありて西方の無量寿仏国に生ずることを得るものは、みな弥陀仏の大願等の業力に乗じて増上縁となす」と。すなはち証となす。またこれ摂生増上縁なり。
　またこの『経』（同）の下巻（意）の初めにのたまはく、「仏説きたまはく、〈一切衆生の根性不同にして上・中・下あり。その根性に随ひて、仏（釈尊）、みな勧めてもつぱら無量寿仏の名を念ぜしめたまふ。その人、命終らんと欲する時、仏（阿弥陀仏）、聖衆とみづから来りて迎接して、ことごとく往生を得しむ〉」と。これまたこれ摂生増上縁なり。
Q　願力を聞いたら定散二善は廃されるのか。
A　廃立門で廃された雑行も他力安心が開けた上から見直せば、他力安心によって救われるべき機類の万品を開示した異方便の仏語であった。一切の行はみな念仏となる。廃せずに摂する。
Q　傍正の関係は？
A　念仏は正にして主。
　定散は傍にして伴。
主伴の関係を持って両三昧宗を立てる。

Q　助正の義相如何。
A　助業は他力の安心決定後の、仏恩報謝の起行として定散万行を修する。
Q　他力の安心決定すれば、余行は必要ないのではないか。定散万行に往因を見るのか。
A　助業の功徳は、浄土成仏の時、内証外用の功徳荘厳となる。他力安心の上には尤も行ずべきものである。

（梯實圓和上『法然教学の研究』96頁）
　行観によれば、法然は諸宗対立の時であったから廃立門を主とされたが、証空のときは、正しく浄土の本義を示すべき時機が到来していたから傍正門によって安心の法門をあかされたとし傍正門を重視している。なおこの場合廃立は教相、傍正は安心、助正は起行と見られていた。

三、宗祖の義

①善導・源空義の相承

「二種深信」

「三心章」（『聖典全書』一巻1288頁）「散善義」深信釈引文

一者決定深信自身現是罪悪生死凡夫、曠劫已来常没常流転、无有出離之縁

二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願摂受衆生無疑無慮乗彼願力定得往生

（1289頁　第七深信）

又深心深信者、決定建立自心

順教（**就人立信**）

修行（**就行立信**）

- 正行
  - 正定業
  - 助業
- 雑行

永除疑錯（**信建立**）

信機　常没決定的な凡夫が

就人　真実決了の仏語によって

就行　選択本願を専修すれば

信法　乗彼願力定得往生

「三選文」（『聖典全書』一巻1324頁）

『銘文』（『聖典全書』二巻641頁）

- 入浄土門
  - 帰正行
    - 専正定業
    - 傍助業
  - 抛雑行
- 閣聖道門

「さしおくべし」（『銘文』）

と信知する（決定心）

- 称名必得生　依佛本願故

「信疑決判」（『聖典全書』一巻1298頁）

生死の家には疑をもつて所止となし、

涅槃の城には信をもつて能入となす。

ゆゑにいま二種の信心を建立して、

九品の往生を決定するものなり。

「大願業力の不思議をうたがふこころ」

「真実信心」「菩提のたねなり」

三輩は第十九願成就文

Q　『大経』三輩段を宗祖はどのように位置づけているか？

A　「方便化身土文類」要門釈（『聖典全書』二巻184頁）（『註釈版』376頁）

　　此の願成就の文は、即ち三輩の文是也、『観経』の定散九品之文是也。

Q　元祖は第十九願をどのように見ていたか。

A　三義有り。

　①念仏衆生には臨終来迎の利益があることを誓う願

　②諸行往生を誓う願

③諸行の人を帰入せしむ

Q　①念仏衆生には臨終来迎の利益があることを誓う願　とは？

A　『和語灯録』観経釈（六・四〇三～）と『三部経大意』観経（三・一〇八一～）に示される第十九願は、念仏衆生に摂取不捨の利益があることを五願に開いて示す中、臨終に来迎の利益があることを指し示している。

光明（第十二願）一切衆生に縁を結ぶため
名号（第十七願）一切衆生に聞かせるため
念仏（第十八願）名号を因として衆生を引摂するため
寿命（第十三願）久しく済度するため
来迎（第十九願）臨終種々のさわりを除かんがため

Q　臨終種々のさわりとは？

『西方指南抄』巻上「法然聖人御説法事　来迎」（『聖典全書』三巻868頁）

境界の愛心
自体の愛心
当生の愛心

870頁　魔事　魔王来たりて種々に障碍せり

Q　臨終に障り無く、正念であることが来迎の条件か？

A　ちがう。『往生要集』臨終行儀にしたがって多くの人が臨終正念と来迎を求めていた状況に対して

臨終正念なるがゆへに来迎したまふにはあらず、来迎したまふがゆへに臨終正念なりという義、あきらかなり
（三・八六八）

とその問題点を指摘したことである。人の一生涯の功績は臨終において評価される。その功罪に応じた来迎の有無をたよりにする善悪対の仏教と決別し、本願のはたらきを信ずるか疑うかによって迷悟が別れる仏教を打ち出されていったのが法然聖人であった。

Q　宗祖の相承は如何。

A　『末灯鈔』に

真実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。
（二・七七七）

と表明されているのは、法然聖人が示した摂取不捨の利益の意を承けていると窺える。

Q　②諸行往生を誓う願　文証如何。

A　『漢語灯録』「無量寿経釈」（『聖典全書』六巻315頁）

但念仏の弥勒付属の大利は第十八願成就、助念・諸行往生は第十九願等と三輩である。

二ニハ此ハ廃シテ上ノ助念及ビ諸行ヲ明ニ但念仏ニ故ト者、上ノ本願ノ願成就ノ文ニ雖ニ明但念仏ヲ、上ノ来迎ノ願等ノ中及ビ次ノ三輩文明ニ助念ノ往生・諸行ノ往生ヲ。

立　但念仏　本願願成就文
廃　助念往生　諸行往生　来迎の願等　三輩

Q　宗祖の相承如何。

A　宗祖は生因三願に真仮を分けて、第十九願を諸行往生、第二十願を自力称名念仏往生、第十八願を他力念仏往生と展開した。行は諸行ではなく称名念仏一行、信は第十九願と同じく、行力を往生に向けて回向するというグレーゾーンはすでに第二十願に用意された方便であったと見ていた。

Q　③諸行の人を帰入せしむ願　文証如何。

A　『西方指南抄』中本(5)　十八条法語⒀⒁　（『聖典全書』三巻933頁）

又云、善導は第十八の願、一向に佛號を稱念して往生すと云り。惠心のこゝろ、觀念・稱念等みなこれを攝すと云り。もし『要集』のこゝろによらば、行者においては、この名をあやまてらむ歟と。

又云、第十九の願は、諸行之人を引入して、念佛之願に歸せしめむと也。

Q　⒀条は関係あるのか。

A　本法語⒀⒁を通読してみれば、無相の観念から有相の観念、さらに助念仏から但称念仏名へと、難行から易行に着目点が移行してくる。

Q　引入のようす如何。

A　己が能を中心とする仏道は、仏の本願によって自己の虚妄性を決定的に知らされ、易行である称名は本願に誓われた正定業として選択された行であり、衆生は願力に乗託して往生決定せしめられるのであると知らされる。

Q　己が能力に限界を感じて、易行を選んでいくのは行者の方じゃないか。

A　衆生の行業中心の仏道から仏の本願を基軸にした仏道へと法門が展開することは、もとより仏の選択によって導かれてきた仏道であったと確かめていったのが法然聖人である。すなわち、四十八願の一々が粗悪を捨てて善妙を取っているから四十八願全体を一応は選択本願というが、再往は余行を捨てて念仏を以て往生の本願とする第十八願が選択本願の本義であるというのがそれであった。機が自心の能力によって探し見つけた念仏往生の道ではなく、仏が一切を平等に往生せしめんとする仏願に依る成仏道がすでにはたらいていたのであった。

Q　元祖は独りでこの構造を見つけたのか。

A　善導大師の「称名正定業順彼仏願故」の指南によって「称名必得生依仏本願故」と承けられていく。また「特留章」に

四十八願之中ニ既ニ以テ念仏往生之願ヲ而為トイフコトヲ本願中之王ト也。　（一・一二八四）

とあるように、四十八願は第十八願に統摂される王本願であると見ていた。

Q　第十九願の法門から第十八願の法門に引入されたのち、第十九願の法門に戻ることは可能か。

A　門は閉じられる。

「念仏付属章」に（『聖典全書』一巻1316頁）（『註釈版』七祖篇1273頁）

故に知りぬ、諸行は機に非ず時を失す。念仏往生は機に当り、時を得たり。感応あに唐捐せんや。当に知るべし、随他の前には暫く定散の門を開くと雖も、随自の後には還りて定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉ぢざるは、唯是念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、意これにあり。行者知るべし。

・随自　釈尊が弥陀と意を一致して説く念仏の一門
・随他　釈尊諸仏が未熟の機を誘引するために諸行定散の門を暫く用いること

ひとたび念仏門に帰入すれば二度と後戻りはないので「定散の門を閉づ」といい、究極で真実の仏道であることを「一たび開きて以後永く閉ぢざる」と示した。

Q　宗祖の相承如何。

A　『化身土文類』観経隠顕（『聖典全書』二巻187頁）（『註釈版』381頁）に善導大師の顕の義を承けて、

　　如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。

と、此土入聖を願う者に浄土を願わせる法門であることを表明している。

ただし、第十九願から第二十願への帰入のはたらきも、さらに第十八願へと帰入せしめるはたらきも第二十願の願功すなわち「第十八願の念仏往生を果たし遂げる誓い」に約している。（「三願転入」二・二一〇）

Q　ちなみに、法然聖人は第二十願をどう見ていたか。

A　次の生には往生できなくとも順後生には往生を果たし遂げさせる願であると見ていた（『指南抄』「十八条法語」⑸三・九三〇）。

三輩は『観経』定散九品の文

Q　『大経』三輩と『観経』定散九品の扱いはどうなっているか。

A　善導大師は「定散両益を説くといへども」といって「持無量寿仏名」を付属するといっている。

法然聖人は三輩と九品が開合の意であるという。

宗祖は「化身土文類」に『大経』三輩の文をさして「『観経』の定散九品之文是也」としている。

Q　『観経』定善の機は『大経』三輩のどこになる？

A　上輩。

　　『大経』上輩（『註釈版』42頁）

　　それ衆生ありて今世において無量寿仏を見たてまつらんと欲はば、無上菩提の心を発し功徳を修行してかの国に生れんと願ずべし

今世に於いて見仏を願う機が説かれてある。定善に当たる。

②廃助傍の所拠

石泉	廃立	助正	真	報恩相続の行儀
				五番の得失
				三輩章
				五門相続助三因
			化	化身土文類
		傍正		権実教相
				付属章
				随自真実
				随他方便
円月	安心			
	真			
	一機因体			
	一機修相			
	但念仏			
	化			
	諸行往生要門			
鮮妙	弘願			
	真門自力念仏			
	要門諸行往生			
深励	随自			
	諸行を以て念仏を助けるという意味が強い			
	随他			
	非本願の諸行が念仏と同じような往生行となる			

（梯實圓和上『法然教学の研究』96頁参照）

『西方指南抄』巻下本20十一箇条問答（『聖典全書』三巻1020頁）

〇四〇問。極樂に九品の差別の候事は、阿彌陀佛のかまへたまへることにて候やらむ。答。極樂の九品は彌陀の本願にあらず、四十八願の中になし。これは釋尊の巧言なり。善人・惡人一處にむまるといはゞ、惡業のものども慢心をおこすべきがゆへに、品位差別をあらせて、善人は上品にすゝみ、惡人は下品にくだるなど、ときたまふなり。いそぎまかりてみるべし[云云]。

③「行信」の廃立

「化身土文類」観経隠顕（『聖典全書』二巻195頁）（『註釈版』392頁）

　これによりて方便の願（第十九願）を案ずるに、仮あり真あり、また行あり信あり。

願とはすなはちこれ臨終現前の願なり。

行とはすなはちこれ修諸功徳の善なり。

信とはすなはちこれ至心・発願・欲生の心なり。

この願の行信によりて、浄土の要門、方便権仮を顕開す。

この要門より正・助・雑の三行を出せり。

この正助のなかについて、専修あり雑修あり。

機について二種あり。一つには定機、二つには散機なり。

また二種の三心あり。

また二種の往生あり。

二種の三心とは、

一つには定の三心、二つには散の三心なり。定散の心はすなはち自利各別の心なり。

二種の往生とは、一つには即往生、二つには便往生なり。

便往生とはすなはちこれ胎生辺地、双樹林下の往生なり。

即往生とはすなはちこれ報土化生なり。

またこの『経』（観経）に真実あり。これすなはち金剛の真心を開きて、摂取不捨を顕さんと欲す。しかれば濁世能化の釈迦善逝、至心信楽の願心を宣説したまふ。

報土の真因は信楽を正とするがゆゑなり。

ここをもつて

『大経』には「信楽」とのたまへり、如来の誓願、疑蓋雑はることなきがゆゑに信とのたまへるなり。

『観経』には「深心」と説けり、諸機の浅信に対せるがゆゑに深とのたまへるなり。

『小本』（小経）には「一心」とのたまへり、二行雑はることなきがゆゑに一とのたまへるなり。また一心について深あり浅あり。深とは利他真実の心これなり、浅とは定散自利の心これなり。

〔第十九願　仮〕

行　修諸功徳
信　至心発願欲生　―　によって要門を顕開（方便権仮要門より　出せり）

正　五専　―　専修
助　助業　―　雑修
雑　雑行

観経の三心
『二巻鈔』下307

自利三心　―　定三心　―　便往生
　　各別　　散三心　―　胎生辺地　―　（発願）　―　浅心　―　浅
　　双樹林下

〔第十九願　真〕

利他三信　―　金剛真心　―　即往生　―　信楽　―　深心　―　一心　深
大経三信　　摂取不捨　　報土化生　　疑蓋無雑　　二行無雑
勧誘諸機　　報土真因
通入三信
金剛真心
不可思議
信海

『大経』　『観経』　『小経』

行

Q　宗祖に法然聖人の廃立の義を承けた文はあるか。

A　『本典』全体が廃立の義である。

立　行巻　名号
廃　化巻　要門　　正　五種の正行（五正行の一々を専修する自力の「五専」）
　　助　名号を除きて以外の五種（四種の助業＋万行随一の称名）
　　雑　正助を除きて以外をことごとく雑行と名づく。
　　横出・漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門

「化身土文類」観経隠顕
（『聖典全書』二巻195頁）（『註釈版』392頁）
この要門より正・助・雑の三行を出せり。

（『聖典全書』二巻197頁）（『註釈版』394頁）

正とは五種の正行なり。助とは名号を除きて以外の五種これなり。雑行とは、正助を除きて以外をことごとく雑行と名づく。これすなはち横出・漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門なり。

（『聖典全書』二巻197頁）（『註釈版』395頁）

五専とは、一つには専礼、二つには専読、三つには専観、四つには専称、五つには専讃嘆なり。これを五専修と名づく。

『二巻鈔』（『聖典全書』二巻301頁）（『註釈版』530頁）

一には正行定心念仏、　※観察※

二には正行散心念仏なり。　※万行随一の称名※　＝中略＝

【122】　また正の散行について、四種あり。

読誦　礼拝　讃嘆　供養

【123】　上よりこのかた定散六種兼行するがゆゑに雑修といふ、これを助業と名づく。名づけて方便仮門となす。また浄土の要門と名づくるなりと、知るべし。

Q　助業は所廃なのか。

A　「行文類」に「三選の文」が引かれていることから明らかだ。

Q　文を読め

A　（『聖典全書』二巻48頁）（『註釈版』185頁）

【68】　またいはく（同）、「それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を閣きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば、正・雑二行のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正・助二業のなかに、なほ助業を傍らにして、選んで正定をもつぱらにすべし。正定の業とはすなはちこれ仏の名を称するなり。称名はかならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑに」と。

Q　「正行を修せんと欲はば、正・助二業のなかに、なほ助業を傍らにして、選んで正定をもつぱらにすべし」の文意如何。

A　『尊号真像銘文』（『聖典全書』二巻641頁）（『註釈版』七祖篇666頁）

「欲修於正行正助二業中猶傍於助業」といふは、正行を修せんと欲はば、正行・助業二つのなかに助業をさしおくべしとなり。

「助業を傍らにせよ」を「さしおくべし」と言い替えることによって、助業と正定業の廃立の関係が決定的になる。

こうして親鸞聖人が助正法門を論じられるのは方便の行信を簡別される時に限り、真実の行信を助正で論じられることはなかった。

信

Q　法然聖人の信心の廃立はあるか？

A　信疑決判。

Q　宗祖の相承は？

A

信　顕真実　教　行　証　真仏土
疑　顕方便　化身土

教	大無量寿経			釈尊が説法されたことば
行	称名を相としているような本願（因）成就の名号（果）	往相回向	因	説法の内容 衆生往生の因果
信	本願成就を疑い無く信ずる			
証	往生即成仏の仏果 仏果の悲用	還相回向	果	
真仏土	仏果の体	回向の本源		

要門　諸善
　定善　十三観　息慮凝心　　心を散らさず一点に集中する禅定
　散善　三福　散乱心　　散乱心のまま廃悪修善
真門　弥陀念仏
　廃悪修善の定散心をもって行ずる念仏は、本願の大悲を見失い自力回向の行と勘違いする罪
弘願の行信は
　非定非散
　非行非善　行者の行に非ず。行者の善に非ず。
　　「信文類」大心嘆徳（『聖典全書』二巻91頁）
　　凡大心海を按ずれば、……
　　非行非善、……非定非散

第十九願
行　発菩提心　修諸功徳
信　至心　自利真実　　発願　　欲生　不定希求

第十八願
行　乃至十念
信　至心信楽欲生

乃至　一多包容　従多向少　業因門　従少向多　起行相続門
『西方指南抄』巻下　十一箇条問答8（『聖典全書』三巻1023頁）
信おば一念に生（むま）るととり、行おば一形をはげむべし

四、要真二門と権仮方便

①方便行信の設意

Q　方便行信の設意如何。

A　①簡非　選択廃立の法門が確立する。

②権用　大悲の調育

行	信	①				
		廃	外教	聖道	要門	真門
諸行	自利		偽の宗教	仮		
称名	利他	立	弘願			真

②

我欲の満足
憎悪を助長　呪い殺す
正しい縁起・因果の道理を説き
貪瞋痴を離れ苦から解放
安らかな悟りを求めよ　と外教を救う
「此の界の中にして入聖得果」(196)
穢土で悟りを求めるので
自身の修行能力の弱さを思い知らせ
浄土願生者に育てる
「安養浄刹にして入聖証果」(197)
聖道門の行者を浄土門へ誘引する肝要な法門
「仮令の誓」「忻慕の釈」(198)
聖道の人に浄土を忻慕させるかりに施設された法門
「本願章」　布施持戒乃至孝養父母等の諸行(1270)
『往生要集』　無相の観念(1215)
有相の観念
助念(1152)
称名(1194)
自力念仏行者に育てる
聞我名号(名号のいわれを聞いて)いるうちに
選択廻向された大行であったと知らされる
積植(信罪福)の心が奪われる
願力に乗託する信心の行者に育てる
「果遂の誓」
三願転入を示し、第十八願へ果たし遂げる(210)
勧誘諸機　通入三信(307)

遇行信を得ば遠く宿縁を慶べ

（参考）真実報土と化身土

梯實圓和上『顕浄土方便化身土文類講述』63頁

如来が「大悲」の本願によって成就された浄土は唯一の真実報土である。しかし自力の行者の機感に応じてそれぞれの行者の感見の前に顕現している浄土は無数にあるといわねばならない。ただ如来は、方便誘引の悲心をもって、行者の機執を強ちに否定せず、一応受け容れて調機誘引されるから方便化身土が成立するのである。しかしそれらは自力のはからいが無くなり、仏智不思議を納領する信心の智慧が開けた瞬間に消えて、如来が成就された唯一なる真実報土が現成し、往生成仏が実現するわけである。

（山上のつぶやき）

因願酬報の土

第十八願は　平等の因　を与え　平等の果　を得させると誓った

本願という設計図で浄土が建立されている。

その浄土に上中下の差別があるなら建築基準法違反だ。（梯和上）

真仮皆是大悲の願海に酬報せり（180）

誓願一仏乗のお育ては無辺不断にゆきわたる。

三輩のお示しは

廃立と

調育であった

②信前信後の助傍

宗祖の文に信後弘願の念仏生活を「助業」と表現したものは見当たらない。しかし念仏の生活を窺うと思われるご文を挙げておくので、ご批判ご指導いただきたい。

信前の助傍

化身土文類　要門釈

信後の助傍

●同類の助業

身業礼拝門

『浄土和讃』讃弥陀偈讃（『聖典全書』二巻353頁355頁）（『註釈版』562頁）

（三五）七寶講堂道場樹　方便化身の浄土なり
　十方來生きはもなし　講堂道場禮すべし

（四一）清風寶樹をふくときは　いつゝの音聲いだしつゝ
　宮商和して自然なり　清淨勲を禮すべし

『法事讃』（『聖典全書』一巻806頁）（『註釈版』七祖篇515頁）

道場の大衆裏あひともに心を至して敬礼し、常住の仏に南無したてまつる。
道場の大衆裏あひともに心を至して敬礼し、常住の法に南無したてまつる。
道場の大衆裏あひともに心を至して敬礼し、常住の僧に南無したてまつる。

口業讃嘆門

偈の制作『正信念仏偈』『入出二門偈』など

『和讃』の執筆

フリガナ付き、今様形式の口業讃嘆を勧められた。
圏発点の朱筆で口業讃嘆を勧める。国宝本高僧和讃旧表紙見返りに見える。
（『聖典全書』二巻402頁）圏発点は音律をつけて詠唱する上で施されたものという。
（平松礼三）

『拾遺古徳伝絵』法然上人伝全集　616P

聲明を興行せられけることは、聲佛事をなすいはれあれば、極樂の寶樹寶池の浪のをと、風のこゑも、みな苦空をとなへ常樂をしらぶ。これになずらへて、本願の妙理をあらはし、念佛の氣味をまさんがために五音をととのへ七聲をただしくして、彼依正二報を嘆ずべし。然者聽聞
隨喜のたぐひ、入宗の方便となりぬべし、

『改邪鈔』14（『註釈版』214頁）

それ五音七声は人々生得のひびきなり。弥陀浄国の水・鳥・樹林のさへずる音、みな宮・商・角・徴・羽にかたどれり。これによりて曾祖師聖人（源空）のわが朝に応を垂れましまして真宗を弘興のはじめ、声、仏事をなすいはれあればとて、かの浄土の依報のしらべをまなんで、迦陵頻伽のごとくなる能声をえらんで念仏を修せしめて、万人のききをよろこばしめ、随喜せしめたまひけり。それよりこのかた、わが朝に一念・多念の声明あひわかれて、いまにかたのごとく余塵をのこさる。

（中略）

詮ずるところ、ただおのれが声の生得なるにまかせて、田舎の声は力なくなまりて念仏し、王城の声はなまらざるおのれなりの声をもつて念仏すべきなり。声、仏事をなすいはれもかくのごとくの結縁分なり。音曲さらに報土往生の真因にあらず。

『尊号真像銘文』（『聖典全書』二巻624頁）（『註釈版』七祖篇655頁）

讃嘆

「称仏六字」といふは、南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。「即嘆仏」といふは、すなはち南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになるとなり。また「即懺悔」といふは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなはち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになると申すなり。「即発願回向」といふは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなはち安楽浄土に往生せんとおもふになるなり、また一切衆生にこの功徳をあたふるになるとなり。「一切善根荘厳浄土」といふは、阿弥陀の三字に一切善根ををさめたまへるゆゑに、名号をとなふるはすなはち浄土を荘厳するになるとしるべしとなりと。智栄禅師、善導をほめたまへるなり。

回向

浄土荘厳

『親鸞聖人御消息集』8（『聖典全書』二巻833頁）

『親鸞聖人御消息』40（『註釈版』806頁）

回向

一念のほかにあまるところの御念佛を法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦・彌陀如來の御恩を報じまいらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さるべくさふらへ

『正像末和讃』聖徳奉讃（『聖典全書』二巻513頁）（『註釈版』七祖篇513頁）

（八七）

他力の信をえんひとは

佛恩報ぜんためにとて

如來二種の廻向を

十方にひとしくひろむべし

●異類の助業

廃悪修善

『末灯鈔』末20（『聖典全書』二巻811頁）（『註釈版』738頁）

信前
まづをのをのの、むかしは彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしましさふらふしが、釋迦・彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをもききはじめておはします身にてさふらふなり。もとは无明のさけにゑひふして、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒をのみこのみめしあふてさふらふつるに、佛のちかひをききはじめしより、无明のゑひもやうやうすこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのまずして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふてさふらふぞかし。

信後
……中略

阿弥陀仏の薬
前
もとこそ、こゝろのまゝにてあしきことをもおもひ、あしきことをもふるまひなむどせしかども、

後
いまはさやうのこゝろをすてむとおぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにてもさふらはめ。

（信後は）もともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなんどせじとおぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにてもさふらはめ。

中輩
『法事讃』（『註釈版』七祖篇528頁）
一切の仏と舎利ならびに真法と菩薩・声聞衆に供養したてまつる。この香華雲荘厳供養海を受けたまへ。

世善
『親鸞聖人御消息集』7（『聖典全書』二巻830頁）
『親鸞聖人御消息』25（『註釈版』七祖篇784頁）
国家社会の公
念佛まふさんひとびとは、わが御身の料はおぼしめさずとも、
の秩序平和
朝家の御ため、（オオヤケノオンタメトマフスナリ）
国の民、百姓、
國民のために、（クニノタミヒャクショウ）
庶民の平和福
念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。
祉
世の中の平和
世のなか安穏なれ、佛法ひろまれ
安穏

雑行
他仏他菩薩
『法事讃』（『註釈版』七祖篇530頁）
【30】　行道の讃梵の偈にいはく、
弥陀世尊を奉請す道場に入りたまへ［散華楽］
釈迦如来を奉請す道場に入りたまへ［散華楽］
十方の如来を奉請す道場に入りたまへ［散華楽］

【参考　平成十九年「正助二業」本山判決】

〔題意〕

善導大師にはじまり、法然聖人、親鸞聖人と伝承されてきた浄土真宗の行業論において、正助二業論がしめる位置とその意義について論究する。

〔出拠〕

①『散善義』　就行立信釈
②『選択集』　二行章、三輩章、三選の文
③「化身上文類」　要門釈
④『愚禿鈔』下巻
その他

〔釈名と物体〕

正助二業の正とは正定業の略称、助とは助業の略称である。正定業とは、正は正当、正直の義、定とは決定の義、業とは行業の義で、正定業とは正当なる決定往生の因となる行業ということである。しかし助に対して正と言う場合は、補佐に対して君、長、主の義になる。

助とは扶助、資助、補佐の意味で、主なる者を助けて事業を成就させるはたらきを持つものをいう。したがって主であり、君長である称名を扶助し、資助する行業を助業という。しかし助を随伴の意味で解釈する人もある。もっとも助に随伴の義は直接には出てこないから、宗義によって与えた釈名といえよう。

なお正定業の行体は、五正行中の第四の称名をいい、助業の行体は読誦、観察、礼拝、讃嘆供養の四行をいう。ただし讃嘆と供養を分ければ五行となる。

〔義相〕

① 善導大師の正助二業説

『散善義』の深心釈下に就行立信釈を施し、所信の行法を簡択して、一切の往生行を正行と雑行に分判し、雑行を捨てて正行に帰すべきことを明かし、さらに正行について正定業と助業とを分別して、所信の行業は称名一行であるといわれている。称名のみを正定業とするのはそれが第十八願所誓の行であり、決定往生の行業であるからである。

なお正行とは正当な往生行ということで、阿弥陀仏とその浄土を所対とした本来の往生行をいい、雑行とは、本来は此土入聖の行であったのを往生行に転換したもので、非往生行を往生行とした、邪雑の行であるから雑行という。またその行体は諸善万行と言われるように雑多であり、また人天乗、三乗の行が雑った雑?の行であるから雑行といわれるのである。詳細は正雑二行論に譲る。なお就行立信釈では、正定業を主として正助二業を修する者には、親、近、憶念不断（無間）の徳があって、決定往生の果を得るが、雑行は疎、遠であり、憶念間断するから、決定業ではないとされている。

『往生礼讃』前序には、安心と起行と作業という三門をもって浄土教の信行を顕し、六時礼讃といわれるような浄土教儀礼を教義的に位置付けられていた。安心門とは往生の因である信心を安立する法門ということで、『観経』の三心で示されている。その三心は深心に帰し、深

心は煩悩具足の凡夫が本願の称名を決定往生の行と信ずるという二種深信としてあらわされているが、それは称名一行を正定業とする「散善義」の就行立信釈と同じであった。起行門とは安心門において確立した念仏往生の信心が相続して行を起こしていくありさまを示したもので、『浄土論』によって礼拝、讃嘆、観察、作願、回向の五念門として示される。しかし作願・観察二門の順序を変えて止観中心の行業体系と区別し、また讃嘆門下の称名を安心門にくりあげて広讃とし、五念門全体を念仏往生の信心の相続相としての浄土教儀礼を意味付けられたのであった。作業門とは、起行における能修の心得と修相を四修として示したものである。

こうして安心門では念仏往生の正因決定を二種深信を中心に明かし、起行門と作業門とでは仏恩を念報し自行化他する相続行としての儀礼を中心に明かされていた。その両者の関係を『往生礼讃』「日中讃」には「五門相続して三因を助く」（『註釈版聖典』七祖篇・七〇四頁）といい、『法事讃』上には「三因・五念畢命を期となし、正助・四修すなはち刹那も間なく」（『同右』五〇九頁）等といわれているように両者は所助と能助のあり方をしていると見られていた。それと合わせると「散善義」の称名正定業は、安心門から立つ往生の業因をあらわす名であり、助業は浄土願生者として相応しい相続起行を顕わす宗教儀礼等の行業の実践を勧励する名目であったことがわかる。すなわち正定業と助業とは業因門における対目ではなかったことがわかる。ただし起行門では、正定業たる念仏を中心に五念門行が相続していくから、両者の間に主伴の関係が成立する。それを正業と助業といわれたのであろう。

②法然聖人の正助二業説

法然聖人は、「散善義」の就行立信釈をうけて、二行章では正雑二行を廃立するために五番の得失を判定されている。その場合、五番の得を正助二業の得として顕わされているが、しかしそれは助業が持っていた得ではなくて称名の得を助業に及ぼしたものであった。それは不廻向廻向対を論証するのに六字釈を引用し、名号の徳義として廻向があるから、機の廻向は不用であるといわれていることで明らかである。また正定業と助業とでは、本願行と非本願行の違いがあると明言し、また三輩章では廃立・助正・傍正の二義の中では、善導大師によって廃立の一義によって業因を決着されていた。特に三選の文では、聖浄二門、正雑二行の取捨を明らかにし、最後に正助二業について、「なほ助業を傍らにして選びて正定をもつぱらにすべし」といい、正助二業の選択を明かして「称名必得生、依仏本願故」と断定されていた。これによって、法然聖人が、選択本願によって往生の業因を顕わされる時には、雑行は勿論、助業も廃して、ただ称名一行による報土往生を主張されたことがわかる。それをまた「諸人伝説の詞」には「本願の念仏は、ひとりだちをせさせて助をささぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にむまる。」（『真宗聖教全書』四・六六二頁）といわれたのであった。

③親鸞聖人の正助二業説

親鸞聖人は、法然聖人の意を受けて、『尊号真像銘文』に、三選の文の「なほ助業を傍らにして選びて正定をもつぱらにすべし」を「正行を修せんと欲はば、正行・助業二つのなかに助業をさしおくべしとなり。選応専正定といふは、選びて正定の業をふたごころなく修すべしとなり」と釈されていた。「助業を傍らにせよ」を「さしおくべし」と言い替えることによって、助業と正定業の廃立の関係が決定的になる。また「二心なく」とは一心を顕わしているから、三選の文は、行は称名一行、信は無疑の一心という一行一心を顕わすと領解されていたことが

分かる。

『教行証文類』でもこの筆格は変わらない。真実の行信を顕わす「行文類」では、助正の分別はされず、専ら念仏一行についてその徳を讃嘆し一乗の行法を顕わし、「信文類」でも、助正の沙汰はされず、三心を一心に収めて機受の相を顕わされていた。真実の行信は、五正行でも助正でもなく、無疑の一心をもって、名号の一行を受行するという一行一心の法門として顕わされていたのである。

それに対して雑行はもちろん五正行、助正二業、専雑二修等はすべて「化身上文類」で詳細に明かされていく。「化身上文類」要門釈に第十九願を釈して「この願の行信によりて、浄土の要門、方便権仮を顕開す。この要門より正・助・雑の三行を出せり」（『註釈版聖典』・三九二頁）といわれていた。「正助雑の三行」は要門から出た方便仮門の行であると言われるのである。それを釈して「正とは五種の正行なり。助とは名号を除きて以外の五種これなり。雑行とは、正助を除きて以外をことごとく雑行と名づく。これすなはち横出・漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門なり」といわれている。ここで除かれた「名号」とはいうまでもなく正定業である弘願他力の称名であって、それは要門から出た行ではなく選択本願から出た本願力廻向の行であったから除かれたのである。「行文類」では、五願開示の上で「然るにこの行は大悲の願より出でたり」と言い、第十七願によって回向された行であると言われていた。それを称名と言わずに敢えて名号と言われたのは、称名即名号であるような真実大行であったからである。「化身土文類」では、この後すぐに、「すでに真実行のなかに顕わしをはんぬ」といわれた横超の大行を指していた。

それに対してここで「五種の正行」とは、五正行の一々を専修する自力の「五専」を指していたといわねばならない。また「助とは名号を除きて以外の五種これなり」といわれたのは、四種の助業に、機執によって万行随一の位に落在している要門位の称名を加えて、五正行全体を助業の分斉であるといわれたのである。それは『愚禿鈔』下に、弥陀念仏に定心念仏（観察）と散心念仏（称名）をわけ、正行の散行を読誦、礼拝、讃嘆、供養の四種に分類し、それらをまとめて、「上よりこのかた定散六種兼行するがゆゑに雑修といふ、これを助業と名づく。名づけて方便仮門となす。また浄土の要門と名づくるなり」（『註釈版聖典』・五三〇頁）といわれた釈と照応しているからである。それは助正兼行している五正行は、五行全体が助業並みの要門位の行になっているからである。この場合の助業は行体ではなく分斉を顕わしていた。

なお親鸞聖人は、正定業と助業とに、本願行と非本願行との区別を付けずに並列して修しているありさまを助正兼行といい、雑修とも名付けられていた。「善導和讃」に

助正ならべて修するをば　すなはち雑修となづけたり
一心をえざるひとなれば　仏恩報ずるこころなし

（『註釈版聖典』・六九〇頁）

といわれたとおりである。

こうして親鸞聖人が助正法門を論じられるのは方便の行信を簡別される時に限り、真実の行信を助正で論じられることはなかった。

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせご指導下さい。

〒五九九―八一二五
大阪府堺市東区西野５２１　旭照寺
山上正尊
senjakuhongan@gmail.com